

九〇 別所村暮御救米拝借の儀につき願書

乍恐奉願口上之覚

一別所村之儀家数三拾五六軒御座候所、近年引続困窮仕、年々他借ヲ以漸々御年貢上納仕候所、甚々高借ニ相成、何共凌方無御座、依て御時節柄奉恐入候得共、去春御救米奉願上、御慈悲ヲ以八石被為仰付、村中一統難有仕合ニ奉存候、然ル所前文申上候通、殊之外高借ニ付、他借之差別付不申、無扨御郡役様方へ御歎申上、何卒御評儀之上ヲ以、高借差別付候儀御取計之程奉願候処、段々御配意被下、右高借銀間々御仕法御付被下、先頼母子講又年賦或は銀主方江無心、村方之者身分相応割合ヲ以出精仕候得と

(困)

も、今六貫目斗何共仕法付不申、甚以込入申上候、此儘捨置候得ハ直ニ高借ニ相成候儀は眼前之事ニ付、何共奉恐入候得共、格別之御憐愍ヲ以、拾貳石当米御拝借、暮御救米ニ被為仰付、被為遣候ハバ、高借銀差別相仕廻、追々御百姓取続申上度奉存候、斯高借ニ相成候も、下地困窮之村方ニて御座候所、五六年以前別所村限り凶作ニテ、甚難儀仕候、其節無扨他借仕候所、其後とても格別之豊作も無御

こゝ

座、終ニハ高借と相成、自力ニ相叶不申、苦々敷次第御座候、御時節柄右等之儀、奉願上候段重々奉恐入候得共、御慈悲ヲ以、別所村御立被為遣候ハ

ハ、難有仕合ニ奉存候、何卒御慈悲之程偏ニ奉願上
候、此段宜敷被仰上、可被為下候、以上、

河村郡別所村 中

(一八三〇)

文政十三年

年行司 太郎兵衛

寅正月

年寄 千吉

庄屋 新五郎

尾崎三右衛門殿

九一 別所村夫兵衛宅焼失の儀につき上申書

乍恐口上之覚

去ル二日昼八ツ時当村夫兵衛宅焼失仕候ニ付、其
段御断申上候得は倉吉御横目様江御注進被仰上、
御検者御下奉行茂太夫様御越、貴様御立会焼場御
見改之上、火元并ニ村中御呼出シ被成、出火之次
第御吟味被仰付左ニ申上候、

一、二日昼八ツ時夫兵衛妻火事ノと声ヲ立候ニ付、

(駈)

(根)

打驚キ隣家村中欠付見申所、早屋祢迄燃移居申候、
段々相働キ消申候得共、折節山下風強ク水は殊ノ外
遠方ニて手廻シ悪敷ニ付、得消留不申、近村追々馳
付出精被呉候得共、不及力ニ梁行式間半桁行五間□
居本宅壺軒并ニ壺間四方之堀建雪隠壺軒焼失仕候、
尤人馬損茂無御座候段申上候所、右夫兵衛義兼て人
柄如何様之者哉、近キ頃何ぞ心当之儀は無之哉、有
躰申上候様重々被為入御念御吟味被仰付候得共、夫
兵衛儀平日人柄宜敷其外心当之義少シ茂無御座、夫

てあやまち

兵衛口上之通弥手過ニ相違無御座、乍恐御慈悲之上
宜敷被仰上、可被為下候、以上、

河村郡別所村 村 中

(二七八二)

安永十年

丑三月四月

五人組頭 忠右衛門 印

同断 文 七 印

同断 藤治郎 印

音田弥十郎殿

年寄 喜兵衛印
庄屋 文治印

前書之通御檢者御下奉行茂太夫殿私立会重々入念吟
味仕候所相違無御座候、以上、

音田弥十郎印

丑三月四日

伊木半弥様

九二 別所村元右衛門外二名金毘羅参詣の儀につき
願書

乍恐奉願口上書之覚

一当村 元右衛門

一同 清右衛門

一同 繁三郎

々

右三人之者心願御座候ニ付、此度讃州金毘羅山え参詣
仕度、来月五日出立日数拾日之間旅出御免被伝付候
様、奉願上候。何卒宜敷被仰上、可被為下候、以上、

河村郡別所村

(二八六六)

(肝煎力)

慶応弍年寅五月

□□ 治左衛門

庄屋 文治郎

秋田兵藏殿